

菊水祭の華 本郷町の山車

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



復元された
火焰太鼓山車等
とともに

今年も二荒山神社の秋の祭り「菊水祭」が近づいた。菊水祭には流鏑馬が行われ、鳳輦の渡御行列が市中を練り歩く。由緒ある二荒山神社の祭りに相応しい立派な祭りである。これでも十分見ごたえのある祭りであるが、戦前までは鳳輦の渡御行列の後に氏子町民が練り出す華やかな屋台や山車が続いた。最盛時の江戸時代弘化四年には何と三十八町の町内から屋台や山車等八十一種が練り出した。ところが明治期になると二荒山神社では、戊辰戦争で焼

失した社殿の再建や御神領千五百石を失ったことなどから菊水祭が簡略化された。それに呼応するかのようになり氏子町民による祭礼行列も衰退したのである。氏子町の中には屋台や山車を他町に売却する所も現れた。それに追い打ちをかけたのが昭和二十年七月十二日の空襲で、市内に残る屋台・山車の多くが焼失し、僅かに本郷町の山車、伝馬町・蓬萊町・大黒町の屋台の計四台が焼失を免れ完全な形で残ったのである。

本郷町山車は、形状上「外輪二層式人形山車」とされるものである。山車を支える車輪は外輪式の四輪で、山車本体の二層目に大きな箱型の土台を持ち、その上に甲冑を着け錦の御旗を手にした神功皇后、赤子の誉田別命(後の応神天皇)を抱いた武内宿禰の三体の人形を飾る二層式のものである。

人形の製作者は、三代目原舟月である。三代目原

秋月(以下原秋月)は文政九(1826)年、江戸の人形師の家に生まれた。十歳の時に病床の父・二代目の跡を継ぎ、以来、明治三十二(1899)年、七十三歳で没するまで人形、特に山車人形の製作に携わった稀代の名人である。腕を見込まれた原秋月は、関東各地から山車人形の制作を依頼され三十台程の人形山車が現存する。そのうち栃木県内には栃木市に四台、佐野市に一台、さくら市に一台、それ

本郷町の山車は、原秋月が本郷町に移り住んで人形の製作にあたったといわれ、明治十四(1881)年十月に完成したものである。

原舟月の作品の中でも三体の人形は優秀作として名高く、かつ同人の作品中、保存状態は最上級である。加えて誉田別命の人形は、四股の関節が曲がり、座ることが可能な三つ折れ人形の構造を有するなど、山車人形として極めて



2011年時の
本郷町山車
1台だけで
寂

て貴重な作品である。

ところでこの山車は、神功皇后が妊娠していたにもかかわらず朝鮮半島に出兵し、帰国後に誉田別命を無事出産し、武内宿禰が抱く生まれたばかりの我が子と対面する場面を表したものである。天皇を元首とする明治国家において、天皇等につつまれる故事を題材とした人形の製作は、忠君愛国につながるとしてもはやされた。本郷町の神功皇后山車は、明治という世相を反映したものであり、本郷町の氏子たちにとって自慢の山車であつたに相違ない。

最近、新石町の火炎太鼓山車と南新町の桃太郎山車が復元された。復元山車と現存する戦前からの屋台・山車が菊水祭の鳳輦の渡御行列に続いて巡行されたらさぞかし宇都宮市民も喜び、宇都宮市に対する誇りも今まで以上にわくであろう。毎年とはいわない。二、三年に一度で良いから見た